



後藤 政郎

GOTO Masao

双日
常務執行役員関西支社長

西郷どんから 大阪の発展、そして今へ



NHK大河ドラマ「西郷どん」をほぼ毎週見ています。藩主の島津斉彬が提唱した薩摩での産業の近代化が、その後の大坂の発展にまで結びつくことをイメージしながらドラマを見ると、関西の財界人としてまた違った楽しみ方ができるかもしれません。

江戸時代後期、薩摩藩は、琉球を通じてどの藩よりも欧米の情勢に接することができました。そのため斉彬は、欧米列強の脅威にいち早く備えようと集成館にて製鉄、造船、化学、大砲、爆薬、ガラスなどの研究を行いました。1863年に薩英戦争で英国と交戦すると、斉彬の遺志を継いだ藩は、殖産興業および集成館事業の重要性をあらためて認識し、1867年に日本初の紡績工場である鹿児島紡績所を設立します。日本紡績業の発祥ともいえる集成館事業に関しては、「明治日本の産業革命遺産」として世界遺産に登録されています。薩摩藩は、その成果をもって大阪近くに堺紡績を設立。その後、次々と紡績工場が建設された大阪は「東洋のマン彻スター」と呼ばれるとともに、紡績業は膨大な外貨をもたらす日本最大の製造業にまで成長しました。

実は、紡績会社に綿花を供給するために設立された当社の前身の一つ、日本綿花の社史もこの鹿児島紡績所から始まります。

紡績業の発展には、薩摩藩士で後に「近代大阪経済の父」と呼ばれた五代友厚の存在が大きいとされています。五代は薩英戦争の後、幕府に内緒で英国に留学生19人を派遣することを藩主に申し出て、自ら引率者として渡英しました。この時の留学生たちはその後「薩摩スチューデント」と呼ばれ、さまざまな分野で近代化を支えることとなります。五代は、紡績機械を英国から購入とともに、7人の英国人技師を薩摩に招き、鹿児島紡績の立ち上げに尽力します。

明治になり、大阪で堂島米会所、大阪株式取引所(現大阪取引所)、大阪商法会議所(現大阪商工会議所)を立ち上げた五代は、多くの大阪商人に慕われました。そして五代に刺激を受けて紡績業に興味を持った彼らは、巨大資本を必要とする紡績会社を共同で設立していきます。ちなみに日本綿花は、五代と親交の深かった大阪商人など25名により創業されました。その背景には、五代が英国で学んだ「カンパニー」という共同で事業を立ち上げる概念を大阪商人に伝えていたことがあるといわれています。

双日の前身はニチメンと日商岩井。ニチメンの前身は日本綿花、そして日商岩井の前身は、岩井文助商店(後の岩井商店)と鈴木商店です。両社とも開国からほどなくして、大阪・神戸で設立されました。岩井商店の初代社長の岩井勝次郎と鈴木商店の大番頭の金子直吉は、日本を一流の先進国とすることを第一の使命として、軽工業から重化学工業、化学繊維工業に至る80以上の事業会社を生み出しました。これらの産業はすべて、当時の先進技術を駆使した、今でいう先端産業です。

共同で何かをするというカンパニーの精神と先端産業への取り組みは大阪・関西発展の原点であり、そこから学ぶ点も多いはずです。時は今、関西では、産業の転換期に来ているのではないでしょうか。健康医療やIoTなど新たな産業への取り組みが進められていますが、かつて薩摩の人々が未来を見すえて産業を興したように、挑戦し続けることが大切です。

今年は、明治維新150年という記念すべき年です。皆で力をあわせる、さまざまな意味での「カンパニー」の精神と先端産業に果敢に取り組む「進取の気性」の大切さを財界の皆さんと語り、そして未来に続く新たな価値を共同で生み出していくければと、日曜日の夜を迎えるたびにそう決意するものです。
(談)